

嫌われ松子の一生

2006(平成18)年3月22日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督・脚本＝中島哲也／原作＝山田宗樹／出演＝中谷美紀／奥ノ矢佳奈／柄本明／市川実日子／香川照之／伊勢谷友介／瑛太／柴咲コウ／黒沢あすか（東宝配給／2006年日本映画／130分）

……昭和22年に福岡県で生まれた松子が、平成13年に遺体として発見されるまでの53年間の人生を、多様な登場人物と多様な視点から描いた異色作。ミュージカル仕立てのように昭和歌謡をうまく活用しながら、「これで人生が終わったと思いました」と再三くり返す松子の生きざまを見事に浮かびあがらせる手法は中島哲也監督の独壇場……。ユーモラスなシーンも満載だが、キリスト教徒でないあなたの目にもきつと松子が神サマに近づいていることがわかるはず……。こんな、面白くて泣ける映画を私は大好き！

『エルメス』の対極にある松子像とは……？

『電車男』（05年）でエルメス役を演じたのが人気女優の中谷美紀だが、その中谷美紀が「私は松子を演じるために、女優という仕事を続けてきたのかもしれませんが」と言って熱演したこの映画の主人公松子は、エルメスの対極にある女性像……？

昭和22年に福岡県大野島で生まれた川尻松子（中谷美紀）は、父親、恒造（柄本明）が病弱な妹の久美（市川実日子）ばかりかわいがるという、少しは不幸な身の上だったかもしれないが、全体としてはごく普通の家庭のお嬢さん。現に就職だって中学校の教師になっているのだから、父親の愛に少し飢えている面があったとしても、その後、なぜこんなに不幸な目にばかりあわなければならないのか不思議に思うほど、不幸のテンコ盛り。そうなったのは一体なぜ……？

男のマザコンも少しかなわないが、女のファザコンは男なしで1人でやってい

くことができないため、次々と男を変えていくことになり、結果的に不幸な運命になるケースが多いもの……？ 私の弁護士としての経験上でも、なぜこんなヤクザな男にこんないい女が、と思うほど、殴られながら男に尽くすタイプの女を何人も見てきたが、松子はそんな女の典型……？ 私は原作を読んでいないが、原作者の山田宗樹は、よくぞここまでトコトン主人公を不幸な目にあわせるストーリーをつくりあげたものだと感心。

タイトルどおりのすばらしい(?) 松子の人生

この映画のタイトルは『嫌われ松子の一生』だが、これには『Memories of Matsuko』というサブタイトルがついている。ここでストーリー紹介をするつもりは全くないが、松子の人生は男なしでは語れないものだし、現によくもこれだけ、とっかえひっかえ男とくつつくものだと感心するほど、男関係が途切れないのが、松子の人生の特徴……？ それは、独りぼっちの寂しさに耐えられない松子の性格によるものが半分だが、後の半分は、男からみても松子が魅力的で放っておけない女だと思ってしまうため……？

したがってそんな松子という女性の本当の姿を浮かびあがらせるためには、いつ、どんな男と、どんな事情で、どういう関係になり、そしてそれぞれどういう結末を迎えるのかを、ある程度把握しておく必要がある(?) ので、以下、少しくどくなるかもしれないが、その「男関係」のさわりだけを……。

Memories of Matsuko その1 中学教師からの転落

松子が中学校教師になったのは父親の望みどおりだから、普通にその仕事をこなしていれば、何も問題はなかったはず。松子の最初のつまずきは、自分のクラスに問題児の龍洋一（伊勢谷友介）がいたため。修学旅行の際に発生した1万2000円の窃盗事件が、次第にややこしい様相となったのは、もちろん松子の責任もあるが、それ以外にも教頭（竹山隆範）や校長（角野卓造）らの「コトなかれ主義」が大きな原因。しかし、その最大の原因は、本当は松子に憧れていた問題児の洋一が自分でも訳がわからないまま、松子や教頭に対してとった行動だが、さてそれはどんな行動……？

教頭から辞表を書かされた松子は、ボストンバッグに身の回りの物だけを詰め込んで家を飛び出そうとしたが、それを止めようとしたのは妹の久美。ところがそんな久美に対して松子がとった行動は……？ とにもかくにも、ここから松子の人生は大きく狂い始めることに……。

Memories of Matsuko その2 太宰治ばりの作家との恋は？

松子が最初にホレて同棲を始めた男は、自分が太宰治の再来だと信じている作家の八女川徹也（宮藤官九郎）。作家などという商売は、『ALWAYS 三丁目の夕日』（05年）を観るまでもなく、売ればいいものの、売れなければただのクズ……？ しかも、自称で太宰治の再来と名乗っているということは、それだけプライドが高いということだから、自分の小説を受け入れない出版社や世間に対してはひどくひがみっぼいはず。そしてそのくせ、同棲している女に対しては、偉そうに当たり散らし、平気で暴力を振るうというのが相場……？ ところが松子はそんな男の才能を根っから信じ込み、ほとんど縁の切れている弟の紀夫（香川照之）にまで借金を頼み込む始末。これによって「縁切りだ」と弟から宣言されながら、一時のお金の工面はできたものの、その翌日に八女川は列車に飛び込んで自殺。本人はそれでいい気なもんだが、残された松子は……？

Memories of Matsuko その3 ライバルの愛人となった松子は？

この八女川と対照的な男が、八女川をライバルとみていた岡野健夫（劇団ひとり）。現実的な欲望を満たすことから逃げられない岡野にしてみれば、何もかも捨てて「作家」に集中できる八女川がうらやましかったうえ、そんな八女川に献身的に尽くす美しい松子を羨望のままざしで見ていたもの……。そのため岡野は、独りぼっちになった松子を愛人として囲うことになったが、順応性のある（？）松子は、水曜日だけ岡野が通ってくるという愛人生活に十分満足。『Happy Wednesday』などを歌いながら1人悦に入って愛人生活を楽しんでいたが、ある日岡野の奥さん（大久保佳代子）の顔を見てもうと思ったのが運の尽き。その顔を見て、「これなら勝てる！」と独り合点したものの、奥さんから怪しまれ追及された岡野は松子に対して、「お前なんかと一緒にいる気はない。お前の料理

なんか味が濃くて食えない」「ただ、お前の身体が良かったから、気持だけ……」と述べてジ・エンド。さてこれから松子はどう生きていくのだろうか……？

Memories of Matsuko その4 中洲のソープ嬢の女王となれたのは？

21世紀の今の日本の風俗業界においては、ソープランドとかソープ嬢という言葉は死語になっていると思われるが、1970～80年代においては、それが日本列島で大はやり……？ 私が千葉県松戸市にある司法研修所の寮で前期・後期の計6カ月を過ごした1972～73年頃は、私と同世代の友人たちは、川崎のソープランドに通い、なじみのA子ちゃん、B子ちゃんのことをよく話していたもの……？ その時代を象徴する小説が、生島治郎の『片翼だけの天使』だったが、これを二谷英明と秋野暢子主演で映画化した『片翼だけの天使』（86年）も大ヒット。この映画での秋野暢子の体当たり演技はまさに絶品だったことを、私は今でもよく覚えている。ソープランドのメッカは東京周辺、大阪周辺にはたくさんあるが、地方都市の代表は何といっても、北海道はすすきの、滋賀県は雄琴、そして福岡県は中洲……。松子は岡野から縁切り宣言を受けた後、半分ヤケ気味で中洲のソープランド「白夜」で面接を受けることに。そして店長の前で堂々と裸になった松子は見事(?)合格したが、ここですごいのは、それからの松子の精進ぶり。何事にもやり始めると一生懸命になる松子は、ソープ嬢としての肉体労働に耐えていくためには、やはり体力が1番とばかり、日々スクワットで身体を鍛えて頑張ったから、たちまち売り上げNo.1に……。

今人気のテレビドラマ『夜王』以上に厳しい競争に打ち勝った松子だったが、所詮それは一時のこと。若くて美人の次世代ソープ嬢が登場してくると、たちまち松子は落ち目となり、遂にはクビの宣告を。またしても松子はこれからどうするの……？

Memories of Matsuko その5 雄琴での小野寺との一旗揚げは？

松子のような女には必ず誰か男がついてくるもの……。 「白夜」をクビにされた松子に近づき、「俺とチームを組んで雄琴で一旗揚げよう」と持ちかけてきたのは小野寺（武田真治）。松子にとっては、それがうまくいくかどうかはどうで

もいいことで、当面何よりも大切なことは、側に男がいてくれること……。雄琴での「事業立ち上げ」に成功した2人だったが、ここでも男は身勝手なもの……。松子に散々働かせ、売り上げを上げさせながら、自分は次の若い女とイチヤイチャと……。

そんな事実が判明したうえ、松子の稼ぎの金を返さないと小野寺から言われた松子は、勢いのおもむくままに包丁で小野寺の胸をぐさりと……。血しぶきをあびた松子が「これで人生が終わったと思いました」と思ったのは当然。そして松子はここで死のうと窓から飛び下りたのだが、人間そう簡単に死ぬるものではない。動物的な生命力がなお残っていた松子は、窓の手すりに手をかけて、再度よじのぼり、生きていくことになったが、これからは正真正銘犯罪者としての逃亡の旅が……。

Memories of Matsuko その6 通りすがりの理容師とのささやかな幸せは？

逃亡の旅という表現は、松子に対して失礼だったので、撤回しなければ……。松子が目指したのは、最初に同棲した八女川がいつも話していたように、太宰治が自殺した玉川上水での入水自殺であって、決して警察の手から逃げようとしたのではなかった。ところがここでも松子の人生は自分の思うようにいかないもの……。太宰治の時代とは異なり、今では上流で水がせき止められているため、玉川の水量は人間の膝までしかなく、これではとても入水自殺などできるような状況ではなかった。そのことを橋の上から大声で松子に指摘し、その晩一緒にやけ酒を飲んだのは、通りすがりの理容師の島津賢治（荒川良々）。

松子に何か深い事情があると察した島津は、何も聞かず松子の髪をセットしてやるうちに……。そして、いつしか島津の理容院でその仕事を手伝っている松子だったが……。

このまま島津との幸せな生活が続けばよかったのだが、日本の警察はそんな甘いものではない。松子はれっきとした小野寺殺しの犯人なのだから、地道な捜査を続けていけば、犯人の松子にたどり着くことは当然。したがって、ある日警察の手がついに島津理容院に。今さら抵抗しても仕方がない松子は率直にそれに従ったが……。

Memories of Matsuko その7 刑務所での生活と新たな出会いは？

懲役8年の実刑判決を受けた松子は、刑務所内ではある意味模範囚で、何も考えずただ与えられた生活のリズムをこなすだけ。ここで歌われる歌が『What Is A Life』。そして刑務所内でこんな松子に興味を示したのが、沢村めぐみ（黒沢あすか）。めぐみから「外で待っている男はいないの？」と質問された松子は、ある日突然、「そうだ、島津が私を待っていてくれる」と信じ込み、それからは美容師の勉強に励む模範囚に……。ところがこんな松子への島津からの面会はなし。果たして、美容師の資格をとって刑務所から出所した松子を島津は出迎えてくれるのだろうか……？

Memories of Matsuko その8 美容院で働く松子とめぐみとの出会いは？

小説も映画も「つくりモノ」だから、話はさらに次々と展開していく。まず自分の出所を待っていてくれると信じていた島津は、既に新しい妻を迎え子供までも……。その様子を外から見た松子はあっさりと島津をあきらめ、某美容院で働くことになったが、そこで出会ったのが刑務所仲間のめぐみ。これは松子にとっても、めぐみにとっても最良の出会いであり、今やAV女優兼AVソフト制作会社社長として大成功をおさめているめぐみにとっても、松子はずっと心許せる友人となった。

Memories of Matsuko その9 美容院で働く松子と洋一との出会いは？

ところがまたしても間の悪いことに、こんな状況の松子が偶然出会ったのが、あの窃盗事件で大問題の張本人となった龍洋一。洋一は今、チンピラヤクザとして生活していたが、そんな洋一に松子は惹かれていくことに。そしてヤクザの本性を見せる洋一と縁を切れと叫ぶめぐみに対しても、松子は「放っといてくれ」と宣言。そりゃ洋一はうれしいだろうが、それは客観的にみれば松子にとって最悪の選択。しかし今や松子は洋一のためになることなら何でもできるという心境になったとみえて、ヤクザの客とベッドをともにしたり、ヤクの取引の仲介をしたりと、何でも洋一の指示するままの行動をとり、その中に自らの喜びを見い出

すという状況に……。そんなある日、洋一からかかってきた電話は、今すぐ金だけ持って部屋から逃げてこいというもの。指定された旅館に到着した松子がそこで目にした洋一の姿は……？

Memories of Matsuko その10 服役を終えた龍洋一を出迎えた松子だったが……

組から追われる中、松子と一緒に逃げることは甘いと甘い希望を抱いていた洋一だったが、ヤクザの組織はそんな甘いものではなく、洋一が逃げ込んでいた旅館は既につきとめられ、1時間だけの猶予をもらうことに。ところがそこで洋一がたどり着いた結論は、警察に自首してその保護を求めるとのこと。そしてそれは客観的にみればベストな選択だった。無事警察に保護された洋一は裁判を経て刑務所の中に。

そこまではいいのだが、ここからは洋一と松子の間には大きな食い違いが……。それは、松子はあくまでこんな洋一の出所を待ち続ける神サマのような気持ちになっているのに対し、洋一はこれ以上松子に迷惑をかけることができないから、松子のことを忘れようという心境になっていたこと。しかして、洋一の出所の日に洋一を出迎えた松子に対して洋一がとった行動は……？ そして荒れに荒れた洋一はその後どうなるのか……？

Memories of Matsuko その11 松子の53歳の最後は？

洋一から振られてしまった(?)松子は、以降生きていくことについてすべての意味を放棄し、古いアパートの中で1人きりの生活に徹することに……。部屋の掃除もせず、スタイルも気にしない生活の中、松子はそれまで考えられなかったような体形に……。私にはあまり観たくない中谷美紀の姿だが、いくら観たくないと思ってもそれが現実。

しかしそんな松子が偶然、病院で名前を呼ばれた時に会ったのが親友のめぐみ。声をかけてくるめぐみから逃げるように離れていった松子だったが、松子の手に渡されたのはめぐみの連絡先を書いた名刺。そんなものはいらないとばかり、いったんは捨ててしまったものの、再び生きる勇気が湧いてきたのも、その名刺のおかげ。しかし、めぐみに連絡しようと決意しても、その名刺は今や手元にな

し。そこで松子がとった行動とは……？

そしてそんな行動をとった松子が最後に出会った大きな不幸とは……？　ここまで、これでもかこれでもかと不幸な目にあい続ける松子を観ていると、いくら人に対して厳しい目を向ける私でも、かわいそうになり、「もういいだろう」と思ってしまうのだが……。

甥っこがキーパーソン

この映画のストーリー形成に大きな役割を果たすのが、松子の弟の紀夫と紀夫の息子の笙（瑛太）。松子が家を飛び出した後、川尻家にはロクなことはなく、紀夫が松子に呼び出されたのも予想どおり借金のため。そんな松子に対して紀夫は金を出してやったが、これで家族の縁は終わりだと、縁切り宣言をしたから、紀夫の息子の笙は「松子おばさん」の存在すら知らない状態に。今、笙は、ミュージシャンを目指して1人上京したものの、成功はおぼつかないまま、恋人の明日香（柴咲コウ）にも振られてしまい、汚いアパートで1人住まいをしながら、悶々とした生活を送っている状態。そんな笙にとって、「妹が死んだのでお骨をもらうために、上京してきた」と突然オヤジが現れても、とまどうばかり……。しかしなぜか今、松子おばちゃんの汚い部屋の後片付けをしているうち、笙は何とも破天荒ながらいかにも人間味たっぷりの松子の生涯に触れ、次第に共感を覚えていくことに……。

他方、紀夫は問題ばかり起こし川尻家の家族をバラバラにしてしまった松子を恨んでいるものの、必要最小限の協力だけは……。

こんな2人がこの映画における松子の紹介役となるが、キーパーソンは甥っこの笙。ちょっととぼけた雰囲気ながら、進行役をきっちりと果たしているのはさすが……。

洋一の再生は？

松子も孤独だが、洋一は小さい時から松子以上に孤独で、自分に対して優しくしてくれる人など誰もいなかった。中学校時代に抱いていた松子への憧れも率直に表現することなどとてもできないまま問題児となって……。洋一は東京でチン

ピラヤクザの生活をしていたが、再会した松子は今やそんな洋一に対してとことん尽くしてくれる存在に。しかし誰からも愛された経験のない洋一は、そんな松子にとまどうばかり……。

刑務所の中で、松子のことを忘れなければならないと考えた洋一は、ある時聖書に出会い、「人を許す」という言葉の意味をはじめて考えることに……。そんな洋一が気づいたことは、松子はまさに神の存在だということ……。とことん不幸な松子と、そんな松子によって救われようとする洋一との感動的な出会いと別れを、若い笙はどのように感じとることができるのだろうか……？

昭和歌謡の数々とミュージカル仕立ての工夫……

松子は昭和22年生まれだから、昭和24年1月生まれの私同様に、高度経済成長する昭和の時代を生きてきた同世代の人間。中学校の教師になりながら、龍洋一という問題児の「窃盗事件」の処理を誤っただけで、「これで人生が終わったと思いました」というのはちょっとどうかと思うが、家を飛び出してしまったのは、病身の妹の存在や父親からの愛情の飢えなど複雑な背景があったため……。

20代の松子は、以降、同棲生活、愛人生活、ソープ嬢……とその生活を変遷させていくが、53歳で死亡するまで、いつもバックに流れている音楽は、その時代を象徴する昭和歌謡の数々。まさに「歌は世に連れ世は歌に連れ」という言葉がピッタリ……。

面白いのは、松子の各時代を、松子がある時はコミカルに、ある時はシリアスに、ミュージカル風に歌いあげていく中で物語を展開させていくこと。その主な曲は、①『Happy Wednesday』、②『What Is A Life』、③『LOVE IS BUBBLE』だが、これがいかに松子の生き方にピッタリ。ミュージカルの嫌いな人は「何だ、これは！」と違和感をもつかもしれないが、私はこういう描き方が大好き……。

さらに、映画全編を通じて流れる『まげてのぼして』という、1度聴いたらすぐに覚えられる簡単な曲が印象的。松子の子供時代を演じる奥ノ矢佳奈が歌うこの歌は、子供時代の愛唱歌というにとどまらず、松子の生涯を通じて歌い継がれ、人生の重みをもった歌になるところがミソ……。

2006(平成18)年3月23日記